SHUFFLE!～帰って来た少年～

欠陥電気

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＨＵＦＦＬＥ！～帰って来た少年～

【Ｎコード】
Ｎ９５５７Ｘ

【作者名】
欠陥電気

【あらすじ】
島が三日月状の形をした島“初音島”
そして、一人の少年の物語が始まる・・・。

初作品初投稿なので駄文ですが、色々とアドバイスをくれると嬉しいです。
この小説は、ＳＨＵＦＦＬＥと、Ｄ．Ｃ．？のコラボ小説です。尚且、主人公が最強のオリ主です。そして、作者はＳＨＵＦＦＬＥの原作をプレイしたことはありません。なので、キャラが違ってたり

しますがご了承下さい。（D．C．？はＰＳ２版ならプレイしています）

最強等が嫌いな方、コラボ小説が嫌いな方はバックして頂いても構いません。それでも良いと言う方は、どうぞご覧下さい。

プロローグ

島が三日月状の形をした島“初音島”

そこには、年中枯れない桜が存在した・・・

その桜は、枯れないと同時に願いを叶える桜の木でもあった・・・

そして、一人の魔法使いの女の子が居た・・・

その魔法使いはこう願った・・・

「ボクにも家族を下さい・・・・。」

それと同時に、とある病室では少年が少女を救うために、ある一つの嘘をついた・・・

「お前の母親を殺したのは俺だ・・・・。」

魔法使いの女の子は家族を手に入れ、少年はある出来事により姿を消した・・・

そこから物語の歯車が少しずつ動き出す・・・

プロローグ（後書き）

アドバイス等あったらよろしくお願いします。

主人公設定（幼少期）（前書き）

今回は、主人公の設定を書きます。

主人公設定（幼少期）

名前：神崎（かんざき）　光麻（こうま）

年齢：７歳

身長：義之と同じ位　体重４０ｋｇ

性別：男

髪色：黒

見た目：若干女の子っぽい顔をしている。

性格：お人好しで、困っている人を放っておけない

魔力ランク：Ｄ（ＢＢ）

幼い頃は無意識に魔力を抑えている

幼い頃はまだ目が、オッドアイになっておらず、両目とも黒

父親から剣術を習っており、剣の扱いはお手のものだそうだ

因みに、両親は結婚してもなお、ラブラブだそうだ（主人公談）

甘い食べ物が大好き。

イメージＣＶ：高橋　美佳子

主人公設定（幼少期）（後書き）

厨二すぎるｗｗ

すみません、主人公の名前を変にして。

第一話（過去編）（前書き）

幼い頃の主人公が初音島に引っ越してきます

第一話（過去編）

「パパ、今度はどこに引っ越すの？」

「今度はな～、お島が三日月の形をした大きな島に引っ越すんだよ～♪」

「そうよ光ちゃん♪とても大きな島だから、友達もたくさん出来るかもね♪」

「うん！僕とても楽しみだよ♪」

あ、自己紹介が遅れたね。僕の名前は神崎　光麻。７歳！

お父さんとお母さんの仕事の都合で前に居た町から、初音島に引っ越す事になって、今は初音島に向かってる途中です♪

「今度の学校でも友達が出来たら良いな～」

物語の歯車はまだ回らない・・・

第一話（過去編）（後書き）

何かgdgdになりそうな気がしてきた（―・―；）

アドバイス等よろしくお願いします。

第二話（過去編）

パパやママとお話をしていると

「まもなく初音島に到着します。お忘れ物の無いよう気を付けてください。」

船にあるスピーカーから定番の台詞が聞こえました。

「お！やっと初音島に着くぞ。」

「光ちゃん、忘れ物の無いようにしといてね。」

「は～い♪楽しみだな～♪」

～船着き場にて～

「おお～！ここが初音島か～！」

「驚くのは早いぞ光麻。この島には、一年中枯れない桜があったんだよ。

「一年中！しかも枯れない桜って！スゴいね！まだあったりするの？」

スゴいや！一年中枯れない桜なんて！まだあるなら、早く見たいな～　そう思い、パパに聞いてみると

「残念。何でも、桜はもう枯れちゃったみたいだぞ」
「ええ～！・・・・ 観てみたかったのに。」
「まぁ光ちゃん、それはしょうがない事だと思うわ。ずっと枯れずに咲く桜なんて物は、無いと思うわよ。」
「うう・・・ そうだよね。枯れずに咲いてるなんて、あり得ないもんね。お花だって、いつかは枯れちゃうもんね。」
「そうよ光ちゃん。」
「パパ、ママ。早くお家に行こうよ」
荷物持って疲れたよ。そう思っていると
「よし！じゃあ、これから住むお家に行こうか！」
「うん！」

第二話（過去編）（後書き）

誰か！誰か俺に文才を！・・・　ああ、学校面倒だな～

アドバイス等あったらよろしくお願いしますね。

第三話（過去編）（前書き）

最近、学校に行くのが楽しいと思うときがある．．．何故だろう？

第三話（過去編）

しばらく町を歩いていると、閑静な住宅街に着きました。

「もうちょっとでお家に着くわよ。家に着いたら荷物を置いて、ご近所の方に挨拶に行きましょう♪」

「そうだな。これからお世話になるかも知れないからな。」

「近所に同年代の子が居れば良いな♪

住宅街を歩いていると、一軒の家が見えてきました。しかも・・・結構デカイ家です。

「ママ、此処が新しいお家?」

「そうよ♪」

「へぇ～かなりデカイね。」

どのくらいデカイかって言うとですね、普通の一軒家と違って、見上げる位の大きさで、横幅も、かなりありますね・・・一対いくらするんだろう・・・この家

「何か・・・前に住んでたお家よりも、レベル上がってない?」

因みに前に住んでた家は、普通の一軒家でした。

「そうかしら？前に住んでた家と、そう変わって無いと思うけど。」

「そうだな。この家も安い方だったからな。さて、一旦家に入って荷物を置こう。」

・・・案の定、家の中も広かったです。一階だけでも、部屋がいっぱいあるし、縁側もあるし、二階もあるし・・・絶対この家の値段高いな・・・いくらするのか気になり、僕はパパに聞いてみた。

「パパ。この家いくらするの？」

「ん～確か、一千万位の安い値段だったと思うぞ。」

「高！一千万って・・・」

しかもその値段を安いと言い張る時点で、金銭感覚おかしいんじゃないの？って言いたくなる。

～しばらくして～

「荷物も置いた事だし、ご近所さんに挨拶してきましょう♪」

「そうだな。なら、早く行くか♪行くぞ光麻。」

「は～い♪行こう行こう♪」

第三話（過去編）（後書き）

俺に文才を下さい！

結構ｇｄｇｄになりそうな気がしてきた。

第四話（過去編）（前書き）

やばい・・・ gd gdかな？

第四話（過去編）

「まずはお隣に住んでいる人達に挨拶に行きましょうか♪」

「よし。そうと決まれば、早く行こうか。」

手土産（有名なイチゴタルト）を持って、隣の家に向かった。

隣の家の立て札を見ると、「芙蓉」という字が書いてあった・・・

何だか、恐い人にあるような名字だね。

「よし。早速押してみるか。」

パパがそう言って、呼び鈴を押した。

ピンポーンという最早聞き慣れた音を聞きながら僕は、どんな人が出てくるのかと、楽しみにしていました。

するとドアから、芙蓉さんのお母さんが出てきました。

「あら？どちら様でしょうか？」

「初めまして。今日からお隣の家に住むことになった神崎です。」

「引っ越しの挨拶をしようと思い、隣に住んでいる芙蓉さんに挨拶をしに来ました。」

二人とも丁寧だな～　僕がそう考えていると、芙蓉さんが

「まあまあ、引っ越しの挨拶ですか♪でしたら、家に上がってって下さい♪丁度今近所に住んでいる方達も居ますし、父と娘も居るので、是非御上がり下さい♪」

それなら挨拶する手間も省けて一石二鳥じゃないか♪

「そうですか♪でしたら、お言葉に甘えて上がらせて頂きますね♪」

「いえいえ♪さぁ、どうぞ上がって下さい♪」

「お邪魔します～♪」

僕が元気良く言うと

「あらあら♪元気の良い息子さんですね♪」

「はい♪自慢の息子です♪」

「えへへ～」

何かそう言われると照れるな〃〃

「是非、娘とも仲良くしてください♪」

「はい！もちろんです♪」

仲良くしてくださいか～早くも友達出来ちゃうかな♪楽しみだな～

リビングに着くと、芙蓉さんのお父さんと僕と同い年位の女の子と、芙蓉さんとは別の両親と、これまた同い年位の男の子が居た。

「（何かあの女の子と男の子全然喋ってないな・・・ 照れ屋さんなのかな？）」

僕はそう考えていた。

「（仲良くなれたら良いな・・・）」

あ、そう言えば手土産渡すの忘れてた。僕はそう思い、キッチンでお茶やお菓子の準備をしている芙蓉さんのお母さんの所へ行った。

「（何て呼んだら良いんだろ・・・ おばさんって呼ぶには若すぎるし・・・ 妥当にお姉さんで良いよね？）あの～お姉さん」

そう呼ぶと、芙蓉さんのお母さんは嬉しそうにこっちに向いた。

「あら～♪お姉さんだなんて嬉しい事言ってくれるわね♪どうかしたの♪？」

「あの、これ・・・ お気に召すかどうかは分かりませんが、どうぞ。」

僕はそう言って、手土産（箱に入ったタルト）を渡した。

「あらあら♪ご丁寧にどうもありがとうね♪」

きちんと渡せて良かった～結構冷や汗かいた気がしたよ～

「中身は何かしら～♪・・・これはタルトじゃない♪うふふ、私好きなのよねタルト♪」

どうやら喜んでくれたようだ♪

「早速このタルトを切って、皆で食べましょう♪リビングで待ってて♪」

リビングの方へ向かうと、とても賑やかになっていた・・・相変わらず女の子は黙っていたけどね。

「おう光麻。こっちにおいで。」

パパが手招きをして僕を呼んだ

「な～にパパ？」

「光麻、自己紹介まだしてないだろ？」

「うん」

「なら、早く自己紹介をしなさい。皆楽しみにしてるからさ♪」

「あ・・・うん！えっと、僕の名前は神崎光麻です。嫌いな食べ物は無いです。代わりに、好きな食べ物ならいっぱいあります♪こんな感じで良いかな？」

「ええ、十分良かったわよ♪」

「ほ～、光麻君は嫌いな食べ物が無いのか。偉いな～」

「ありがとうございます♪えへへ～」

褒められるのはあんまり慣れてないから照れるな～

「じゃあ私達も自己紹介しましょうか♪」

「そうだな、では私から。私の名前は土見隼人だ。で、そっちに居るのが」

「土見由紀と言います♪よろしくね♪」

何故だろう・・・二人とも若いですね。そう考えていると、男の子が

「僕の名前は土見稟です。これからよろしくね。」

そう言って手を前に出した・・・握手だね

「うん。こちらこそ、これからよろしくね♪」

僕はそう言って、握手をした。あとは・・・あの女の子とその両親だね。

「じゃあ今度は私達の番だね。私の名前は芙蓉幹夫です。今キッチンに居るのが芙蓉湊だよ。さ、楓も自己紹介しなさい。」

「う・・・」

女の子はそう言って俯いてしまいました・・・恥ずかしいのかな？

僕はそう思い、女の子の方へ行った。

「・・・っ！」

女の子は僕がこっちへ来て、びっくりしているようだ。

「ねえ」

「は、はい！」

相当恐がっているようだ・・・

「僕は君と友達になりたいな♪あ、もちろん稟君ともね」

「私と・・・友達に？」

「うん。君と友達になりたい。でも、友達になるためには自己紹介が必要だね♪だから、名前を教えてくれないかな？」

僕がそう言うと、女の子の顔が笑顔になった

「！？・・・はい！私の名前は芙蓉楓です。」

「そうか楓ちゃんか♪じゃあ、今から僕と楓ちゃんは友達だね♪」

「ふふ、そうですね♪今から、私と光麻君は友達ですね♪」

「違うよ楓ちゃん。」

「え？」

「稟君とも、僕とも友達だよ♪ね♪稟君♪」

「う、うん。僕も楓ちゃんと友達になりたいな。」

「稟君・・・うん！私も稟君とも友達になりたいです。」

「よし、三人で握手をしよう♪」

僕はそう言って、左手に稟君の手を、右手に楓ちゃんの手を握った。

「これからも、三人友達でいようね♪」

「うん！」「はい！」

三人の手は、きちんと握られていた・・・

第四話（過去編）（後書き）

急展開すぎるかな？文才を下さい。

感想等よろしくお願いしますね

第五話（過去編）（前書き）

ご都合主義乙ですね・・・はい

第五話（過去編）

手を繋ぎ終わった後、僕はこう思っていた・・・

「（この繋がりを壊したくない・・・これからどんな困難が待っていても・・・絶対に守ってみせる！）」

そう固く決意をしていると、キッチンから楓ちゃんのお母さんが来た。

「お茶の準備が出来ましたよ～♪」

時計を見てみると、現在午後2時。おやつには早い時間だが、まぁ気にしないでおこう。

「お茶以外に、神崎さんが持ってきてくれたタルトもありますよ～♪折角ですし、皆で食べましょう♪」

「じゃあ、あなた♪お言葉に甘えて戴きましょうか♪」

「そうだな♪では、戴くとしようか♪」

『いただきます～♪』

「あ～ん♪・・・う～ん美味しい♪流石有名店のイチゴタルトだね♪」

「はい♪このタルト特有のサクサク感・・・それにイチゴの絶妙な甘さがとてもいいですね♪」

皆美味しそうにタルトを食べていました。すると、楓ちゃんが僕にタルトが刺さったフォークをこっちに向けて来ました。

「あの・・・光麻君・・・その、あ～ん〃〃」

「あ、あ～ん〃〃」パクリ

何か恥ずかしいな〃〃

「うん・・・美味しいよ楓ちゃん〃〃」

「そ、そうですよね〃〃」

「あら♪楓ったらやるわね♪」

「お、お母さん！〃〃」

「しかも、間接キスだなんて♪まだまだ若いのに大胆ね♪」

そこまで言われると、楓ちゃんは顔を真っ赤にしていた・・・僕も恥ずかしいんだけどね。しかも、お母さんとお父さんもニヤニヤしてこっちみてくるし・・・何か嫌だな。

しばらくすると時計が、3時位になろうとしていた。

「では、そろそろおいとまさせて頂きます。」

「もっとゆっくりしていけば良いのですよ？」

「いえいえ、他の人達にも挨拶をしなければならないので・・・」

「そうですか～では、また今度いらして下さいな♪」

「はい♪では、お邪魔しました♪」

「お邪魔しました～♪楓ちゃん、稟君また学校でね♪」

「はい♪」「おう」

二人の返事を聞いた後、僕達は芙蓉家から出た。友達が出来て良かったな～。

さて、次は誰の家に着くんだろう？僕は、とてもドキドキしていた。

第五話（過去編）（後書き）

さて・・・すいませんでした！楓のキャラを壊したなら謝ります。
すいませんでした！

ああ・・・原作やらないとな

第六話（過去編）（前書き）

今回は日本語の使い方がおかしい&文が滅茶苦茶の可能性があるのでご了承下さい

第六話（過去編）

楓ちゃんの家を出る頃には、時刻が午後3時３０分を指していた・・・早く挨拶を済ませないとね。

「（やっぱり近所ってなると、楓ちゃんの家を除いておばさんばっかりなのかな～？）」

僕の予想は当たり、歳を取った方が多かった。けど、皆優しそうで良かったな。

流石に時間帯的に、玄関での挨拶のみになった。僕達が挨拶をすると、笑顔で答えてくれたのでスゴく心地よかったです。

ふぅ～。大体は挨拶はしたな～

「よし、光麻。あと二軒くらい挨拶回りをしたら、家に帰って荷物の片付けをしようか。」

「は～い♪」

次に見た家は、壁が白一色で、屋根が赤い色をした、なんともシンプルな家だった。

「じゃあ押すか。」
ピンポーン
この音いい加減聞き慣れたね。そんな風に考えていると、ドアが開き、老眼鏡?をかけたおじいさんが出てきた。
「ん?どちら様ですか?」
「この近くに引っ越して来た神崎です。今日は挨拶をしに来ました。」
「ほうほう挨拶とな。では、私達も挨拶をしないとな。ちょっと待っててくれ。」
おじいさんはそう言って家の中に入っていった。
少し待っていると、おじいさんが二人の女の子を連れて戻って来た。
「すまないな。では改めて、私の名前は朝倉純一だ。ほれ、由夢と音姫も挨拶しなさい。」
『・・・・・』
純一さんがそう言っても、二人は黙っていた。やっぱりいきなりだとそうなるのかな?だったら僕が先に挨拶しようっと。
「えっと、僕の名前は神崎光麻って言うんだ。よろしくね(ニコッ)」

『・・・／／／／／』

あれ？二人とも何か顔が赤いな・・・ 風邪かな？そう思っていると
おだんごヘアーの子が

「ゆめ」

「え？」

「朝倉由夢」

「へぇ～由夢ちゃんか～可愛い名前だね。」

「えへへ～／／／／／」

「むっ・・・ おとめ」

「え？」

「だから！朝倉音姫！」

「おとめちゃんも可愛い名前だね。」

「・・・・／／／／／」

素直に感想を言うと、音姫ちゃんは、また顔を赤くした・・・やっぱり風邪なのかな？

「あらあら♪青春ね♪」

ママが何か言ってるけど、気にしないでおこう。

「ああそうそう。私の名前は神崎由香って言うの。よろしくね♪」

「因みに俺の名前は神崎総司だ。よろしくな。」

こんな感じで朝倉家との挨拶は終わった。

「では、そろそろ失礼します。」

「うむ。いつでも遊びにおいで。」

「これから仲良くしようね♪光麻お兄ちゃん♪」

「うん♪よろしくね。」

「それでは・・・」

「バイバ～イ♪由夢ちゃん、音姫ちゃん♪」

「うん♪またね～」

「・・・・・またね。」

由夢ちゃんは元気良く、音姫ちゃんは小さい声で手を振ってくれた。

何かくすぐったいな。

～自宅にて～

「ただいま～♪」

「さあ、さっさと荷物を片付けるか。」

予め、必要最低限の家具は業者の人が置いといてくれたため、実質そんなに時間はかからないと思う。

「とりあえず食器を棚に入れるか。」

「は～い。」

その後は、作業を終えて、晩御飯を食べて、お風呂に入って、自分の部屋のベッドに横になったら睡魔が襲ってきたので、打ち勝てずに、眠ってしまった。

こんな感じで長い1日が終わった。皆と仲良くしなきゃね。

第六話（過去編）（後書き）

因みに、主人公はフラグを建てていますV（^ー^）V

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9557x/

SHUFFLE!〜帰って来た少年〜

2011年11月8日03時08分発行